

グループ μ の「隠喩の二重提喩論」再考 — (二段階) カテゴリー化理論との関係 —

内海 彰 (utsumi@se.uec.ac.jp)

電気通信大学 電気通信学部 システム工学科

1 はじめに

文彩はテキストの要素に施された変換操作であると規定したグループ μ の『一般修辞学』(Group μ , 1970) では、隠喩は二つの提喩の積であると主張されている。この二重提喩論は、その後の比喩研究において多くの問題点が指摘され、現在では議論の俎上に載ることさえほとんどなくなっている¹⁾。

しかし、隠喩は別の文彩表現に置換可能ではないとか、提喩の定義が不適切であるなどの問題点は確かにあるものの、二重の提喩という考え方の中に、隠喩の理解過程を解明する上で本質的に重要な概念が含まれているだろうと筆者は最近考えている。そこで本論考では、グループ μ の二重提喩論やその批判を再検討しながら、二重の提喩という考え方を基準にして多様な隠喩表現(「XはYである」という基本形式の隠喩から述部に比喩性を持つ隠喩まで)の理解過程の体系化を試みる。その中で、グループ μ が隠喩にはならないと論じた二重提喩のタイプが、ある種の隠喩の理解過程を説明できる可能性を論じる。さらに、現在の認知科学における主流の隠喩理論であるカテゴリー化理論(Glucksberg, 2001, 2003; Glucksberg & Keysar, 1990)や筆者らの二段階カテゴリー理論(内海・坂本, 2006; Utsumi & Sakamoto, 2007a, 2007b)との関係についても考察する。

本論考の以下では、まず2章で隠喩の二重提喩論やそれに対するさまざまな批判について述べる。その中で、二重提喩論やその批判に対する本論考の立場を明確にする。次に3章では、隠喩の構造にふれた後に、隠喩理解に関する現代の認知理論を概観する。最後に4章で、ここまでの議論をふまえて、二重提喩の観点から隠喩の理解過程について捉え直すことによって、新たな二重隠喩論を提案するとともに、現代の隠喩理論との関係やそれらの妥当性について論じる。

2 グループ μ の隠喩の二重提喩論

2.1 提喩

伝統的に、提喩(synecdoche)は類種関係(カテゴリー関係, IS-A関係)に基づく転義(trope)と定義される。

¹⁾『一般修辞学』を中心とするグループ μ の修辞学については、小田(2007)が詳しい。

つまり、種で類(メンバでカテゴリー全体)を表す、または類で種(カテゴリーでそのメンバ)を表す表現である。

- (1) a. 春はお花見の季節だね。
b. 空から何やら白いものが降ってきた。
- (2) a. ごはんを食べに行こうよ。
b. それくらい自分でググれ。

上記の文(1a)における「花」は「桜」を、文(1b)における「白いもの」は「雪」をそれぞれ表しているの、これらは類で種を表す提喩の例である。一方、文(2a)の「ごはん」は「食べ物」を、文(2b)の「ググる²⁾」は「検索するという行為」をそれぞれ表しているの、これらの表現は種で類を表す提喩である。

グループ μ は、このような類種関係に基づく提喩とともに、全体部分関係(PART-OF関係)に基づく転義も提喩として考えている。

- (3) メガネが曇っちゃった。
- (4) 青い目の友達ことができました。

文(3)の「メガネ」はその一部分である「メガネのレンズ」を指しているの、全体で部分を表す提喩であるし、文(4)では「青い目」で「外国人・欧米人(人間)」を表すので、部分で全体を表す提喩である。

そしてグループ μ は、これら二種類の関係を語の意味を分解する以下の手法(Σ 型, Π 型)に対応させて考えた。

Σ 様式: 木 = 桜 ポプラ 樺 ...

Π 様式: 木 = 枝 葉 根 ...

Σ 様式はある概念(類)をその下位概念(種)に分解する方式(グループ μ はこれを概念的分解と呼んでいる)なので、類種関係に基づく提喩は Σ 型の提喩である。一方、 Π 様式はあるもの(全体)をその構成要素(部分)に分解する方式(物質的分解)なので、全体部分関係に基づく提喩は Π 型の提喩である。さらに、一般化(類で種を表す, 全体で部分を表す)を S_g , 特殊化(種で

²⁾名詞(ものごと)だけではなく動詞(行為・動作)にも類種関係が成立することを示すために「ググる」の例を挙げた。ここでは「ググる」の基本義が「Googleを用いて検索する」であるとの前提で、それが上位カテゴリーである「ウェブ検索する」を表しているという点で提喩とみなしている。ただし、「特定のサーチエンジンで検索する」行為が「(ウェブで)検索する」という行為の下位概念と言えるかどうかは実は微妙である。

表 1: 提喩の結合パターンと喩成立の可否

パターン	D	I	A	喩可否
(Sg+Sp) Σ	樺	しなやか	若い娘	可
(Sp+Sg) Σ	緑色	樺	しなやか	否
(Sg+Sp)II	手	人	頭	否
(Sp+Sg)II	船	voile	寡婦	可

類を表す、部分で全体を表す)を Sp と略記すると、(1a) と (1b) は Sg Σ , (2a) と (2b) は Sp Σ , (3) は SgII, (4) は SpII とそれぞれ表すことができる。

2.2 喩の二重提喩論

グループ μ の一般修辞学では、喩は以下のような図式で成立するものとする。

$$D \rightarrow (I) \rightarrow A$$

ここで D は出発点を表す事柄 (たとえられるもの、修辞学でいうところの被喩辞) であり、A は到達点を表す事柄 (たとえるもの、喩辞) を示している。また I は仲介者となる辞項 (被喩辞と喩辞の共通項) であり、多くの場合には言語表現上に陽に述べられていない。矢印は提喩関係が成立することを表しており、 $X \rightarrow Y$ は「Y が X を表す提喩である」ことを意味している³⁾。そして、グループ μ の二重提喩論の核心は、D と I の関係および I と A の関係が提喩であるという点である。すなわち、I は D を表す提喩であり、A は I を表す提喩であり、この 2 つの提喩によって A が D を表す (たとえる) 喩が成立するという主張である。

では、どのような提喩の組み合わせが喩として可能なのだろうか。グループ μ は、D と A が同じレベルになければいけないことから、一般化 (Sg) の提喩と個別化 (Sp) の提喩の組み合わせでなければいけないと考える。したがって、表 1 に示す 4 つの組み合わせが可能である。この中で、喩として成立可能なのは、D と A が一部の意味素を共有するパターンであり、それは (Sg+Sp) Σ 型と (Sp+Sg)II 型の二種類ということになる。(Sg+Sp) Σ 型の喩の例としてグループ μ が挙げているのは、「若い娘」で「樺」をたとえる喩である。一方、(Sp+Sg)II 型の喩としては「寡婦」で「船」をたとえる例を挙げている (仲介項 I に該当する 'voile' は「帆」と「ベール」を表す多義語である。) その他の二つのパターンについては、I として D や A より意味

³⁾なお、矢印の方向が「表現されるもの」から「表現」に向いているのは、話し手 (書き手) が表現したい対象 X からそれを表現するもの Y を発見する (つまり文彩を生成する) という立場からの記述だからである。本論で述べる喩の理解過程の点からは、X は必ず言語表現で与えられるので、逆方向に矢印をたどることになる。

的に広い概念を共有することになるので、喩としては不可と考えている。以上が、グループ μ の喩の二重提喩論の骨子である。

2.3 二重提喩論への批判

喩は二重の提喩であるという主張は、『一般修辞学』の体系の中でほんの一要素に過ぎないにもかかわらず、メタファー研究者から多くの批判が寄せられた (e.g., 橋元, 1989; 森, 2007; 菅野, 2003)。それらの批判は、以下の 3 つに大別できる。

1. 提喩の定義 (規定) に関する批判
2. 提喩の組み合わせ方に関する批判
3. 喩と二重の提喩を同一視することへの批判

本節の以下では、これらの批判について、それぞれ小節を割り当てて議論していく。

2.3.1 提喩の定義に関する批判

提喩の定義に関する問題は、グループ μ の二重提喩論や一般修辞学に特有の問題ではなく、修辞学一般に関わる大問題である。この問題は、(a) 提喩を成立させる関係としてグループ μ があげた類種 (Σ 型) 関係と全体部分 (II 型) 関係を区別すべきか否かという問題と、(b) どの関係に基づく転義を提喩とみなすかという問題に分けることができる。

後者の問題は、提喩と換喩 (metonymy) の分類問題として論じられる。換喩は近接性 (contiguity) に基づく転義 (文彩) であると一般に定義される。近接性は、時空間的な近さに限らず、何らかの意味での近さを表している。例えば、「やかんが沸騰している」の「やかん」は「やかんの中の液体」を指す換喩であるし、「ユニフォームを脱ぐ」は「引退する」を意味する換喩である。ここで問題となるのが、類種関係や全体部分関係を近接性に基づく関係とみなすか否かということである。

Lakoff を中心とする認知言語学においては、全体部分関係は換喩を構成する近接関係の一種 (THE PART FOR THE WHOLE) とみなしている (Lakoff & Johnson, 1980)。さらに、類種関係は独立した関係とはみなされず、全体・部分関係の一種としか扱われていない (Evans & Green, 2006; 谷口, 2003)。菅野 (2003) も類種関係や全体部分関係は換喩を構成する他の関係と区別すべきものではなく、したがって、提喩を換喩から区別する特別な理由はないと考えている。

このような提喩不要論に対して、提喩を換喩とは独立した文彩であると積極的に主張しているのが、瀬戸 (1997, 2007) である。瀬戸はまず類種関係と全体部分関係は異なる関係であるとして明確に区別する。その根拠のひとつとして、分類法や意味論の用語でもこれらが明確に区別されている (類種関係は分類法ではタクソノ

ミー、意味論ではハイポニミー、全体部分関係は分類法ではパートノミー、意味論ではメロニミー)ことをあげている。そして類種関係に基づく転義だけを提喩と規定し、全体部分関係は換喩を構成する一関係に過ぎないと考える。つまり、類種関係だけを別格扱いにして、他の換喩的關係とは認識基盤が異なるという理由で明確に区別したのである。同様の考え方は、佐藤(1978)や野内(2002)にもみられる。特に野内は、ある特定の観点において類似しているものの集まりがカテゴリーを構成するのであるから、類種関係に基づく提喩こそが類似性に基づく文彩であり、換喩とは明確に区別されると主張する。さらに、一般的に言われるように隠喩が類似性に基づく文彩であるように見えるのは、グループ μ の二重提喩論が述べるように、類似性に基づく提喩を介して隠喩が成立するからであるとまで述べている。

本論考では、これらの二つの立場のうち、提喩必要論に全面的に賛成する。つまり、類種関係と全体部分関係は明確に異なる関係であり、提喩は類種関係のみに基づく転義であると規定する。したがって、グループ μ が提示した提喩のうちのII型(全体部分関係に基づく提喩)は提喩とはみなさない。提喩不要論を支持できない理由は、類種関係と全体部分関係を同じ関係とみなすという誤りを犯しているからである。瀬戸(2007)はこの誤りをパートノミー・タクソノミー誤謬(PT誤謬)と呼び、なぜPT誤謬が生じるかを「カテゴリーは入れ物だ」メタファーを用いて巧みに説明している(e.g., 瀬戸, 2007, p.37)⁴⁾。一方、この批判に対して、谷口(2003)はPT誤謬が生じる原因が人間が持っているカテゴリー観や概念メタファーによる認識に起因するのであれば、そのような認識自体が正しいのであり、パートノミーとタクソノミーを区別する必要はないと反論している。もちろん類種関係か全体部分関係かを明確に判断できない場合(特に抽象概念)は存在するかもしれないが、人間の認知機構がPT誤謬に陥りやすいことから、人間の認知機構を考える上でPT区別が重要でないことは帰結されない。カテゴリー化が独立した認知機構であることと、人間がカテゴリー化を他の過程と意識的に区別できないことは関係ないからである。実際に認知心理学において、カテゴリー化が認知における重要なプロセスであることが明らかにされている(e.g., Barsalou, 1983; Rosch & Mervis, 1975)。さらに、多くの分野でカテゴリー化やそれに基づく類種関係が明確に区別されて扱われているという事実も、我々にとって有利に働く。例えば、意味ネットワークやフレームなどの人工知能における知識表現(小倉・小高, 2001)では、類種関係をIS-A関係、

全体部分関係をPART-OF関係(もしくはHAS-A関係)として明確に区別している。これは、類種関係に基づく概念(ものごと)の階層関係を考えることによって、概念の持つ属性・特徴の継承を容易に扱えるからである。ソフトウェア科学におけるオブジェクト指向の考え方においても、同様の理由によりIS-A関係が独立した関係として扱われている。

2.3.2 提喩の組み合わせ方に関する批判

グループ μ が隠喩を成立させる組み合わせせとして挙げた(Sg+Sp) Σ と(Sp+Sg) Π (表1参照)のうち、 Π 型の(全体部分関係に基づく)提喩による隠喩については、その存在が疑わしいという批判がある(橋元, 1989)。確かに、グループ μ がこの例として挙げている寡婦(veuve)で船(bateau)をたとえる表現を隠喩と言うのは難しいであろう。特に、この隠喩の根拠が一つの語(voile)の持つ多義性に依存している点で、「寡婦」と「船」の間に隠喩を成立させる類似性が存在するとは認められない⁵⁾。一般的に、部分(構成要素)を共有して、かつ領域の異なる二つの概念を想定するのは非常に困難である。2.3.1節で述べたように類種関係と全体部分関係は関係の質が異なることや、全体部分関係に基づく転義を提喩とはみなさないことも考えあわせると、このタイプの隠喩の存在を積極的に考える意義は見当たらない。したがって、本論考ではII型の提喩に基づく隠喩は存在しないと考える。

一方、グループ μ が隠喩として成立しない組み合わせとしてあげた(Sp+Sg) Σ パターンの隠喩が存在するかもしれないという指摘(菅野, 2003)もある。しかし、あくまでも存在の可能性を指摘するにとどまっており、具体的に論じている研究は見当たらない。本論考では、4章において、(Sp+Sg) Σ パターンの隠喩が存在するという主張をしていくことになる。

2.3.3 隠喩を二重の提喩と同一視することへの批判

まずは、二重提喩という概念自体の妥当性はさておいて、隠喩を二重提喩と同一視すること自体が、隠喩の古典的理論のひとつである置換説(substitution view)の一種であり、置換説は隠喩理論として不適切であるので、二重提喩論も同様に不適切であるという批判がなされている(橋元, 1989)。置換説とは、隠喩を意味的に等価な字義表現に置き換え可能であるとする説であり、例えば「あの男は狼だ」という隠喩は「あの男は獰猛で危険だ」を間接的に表現しているに過ぎないとみなす。しかし、等価な字義表現に置き換え可能であるというだ

⁴⁾瀬戸が指摘しているように、まさにメタファーやカテゴリーの研究を標榜しているLakoff & Johnson(1980)やLakoff(1987)がしばしばPT誤謬に陥っているのは、皮肉なことである。

⁵⁾仏語を母語とする人々の言語感覚がわからないので断定はできないが、ここに見られる類似は、謎かけ(「 \square とかけて $\times \times$ と解く。その心は?」)という問いかけ形式で見ると共通点がないような二つのことからの共通点を答えることば遊び)の心(共通項)に用いられるレベルの類似性と認識するのが正しいかもしれない。

けでは、隠喩の存在価値(修辞的效果)を全く説明していないし、以下の文(5)のような述部に比喩性を有する隠喩の多くでは、そもそも等価な字義表現というものが存在しない。

(5) 怒りが煮えたぎる。

したがって、置換説の一種である二重提喩論も隠喩の理論として全く不適切であるという批判である。

二重提喩論そのものが隠喩の存在価値を説明していないという点は筆者も同感である。ただし、二重提喩という考え方は変換操作による修辞の体系化の試みの中で得られたものであり、グループμがこのような形式的体系化の枠内で修辞的效果を説明する意図がなかったこと⁶⁾を考えると、二重提喩論に隠喩の存在価値の説明を求めるのは酷と言える。一方、等価な字義表現の存在しない隠喩が二重提喩論の反例であるとする批判については、二重提喩は必ずしも等価な字義表現を前提としないと本論考は反論する。二重提喩の意味するところは、喩辞A(「煮えたぎる」という状態)によって仲介項Iを表し、そのIが被喩辞Dを提喩として表すという構造であるから、被喩辞Dを字義的に表す表現がなくても一向に構わないのである。

二重提喩という概念の妥当性についても、以下の二つの批判がなされている。

- 二重提喩で説明できない隠喩が存在する。
- 二重提喩で説明できる隠喩でない表現が存在する。

二重提喩で説明できない隠喩の例として、前述した文(5)のような用言(動詞句)に関わるメタファー(橋元, 1989)、概念メタファー(6)や構造化メタファー(7)(森, 2007)などが挙げられている。

(6) <感情は液体>

- 相手の気持ちを汲む
- 愛情をそそぐ
- 好意に溢れる
- 嬉しさで胸が一杯になる
- ふつふつと怒りがわきあがる

(7) 「だいじにしていたいてゐるのは、よくわかりますわ。」と、波子はおとなしく答へた。心の戸を、半ばあけて、ためらつてゐる感じだった。あけきつても、竹原はいいつて来ないのかもしれない。(川端康成『舞姫』)

すなわち「XはYだ」に代表される名詞で名詞をととえる典型的な隠喩以外は、ほとんど二重提喩による説明

⁶⁾『一般修辞学』の中では、形式的な変換操作による体系化とは別に「受信者のうちに惹起される情動的状态」(Group μ, 1970, p.292)で定義されるエトスという古典的概念による修辞効果の説明が試みられている。

は成立しないと考えられている。さらに、このような名詞隠喩についても、説明すべき表現(「樺の木」を「若い娘」でたとえる隠喩)よりも説明そのもの(「しなやかさ」が「樺の木」の提喩で、「若い娘」が「しなやかさ」の提喩)のほうが理解が困難であるならば、その理論は失敗であるという批判もなされている(佐藤・佐々木・松尾, 2006)。

また、隠喩でない表現までも二重提喩で説明できてしまうという批判に関しては、橋元(1989)が、隠喩文(8)と同形式の字義文(9)が二重提喩を用いて同じように説明できてしまうという問題点を指摘している。

(8) 人間は葦である。

(9) 人間は動物である。

これらの批判に対して、本論考では否定的な立場(つまり二重提喩論を支持する立場)を取る⁷⁾。二重提喩で説明できない隠喩が存在するという前者の批判については、「仲介項が想定できない」と述べるだけに留まっており、十分な検討がなされているとは言えない。例えば、文(5)のような述部に比喩性を持つ隠喩については、構造(被喩辞Aや仲介項Iが何か)や理解過程についての分析・議論が、名詞による隠喩に比べて極端に進んでいないという現状がある(Utsumi & Sakamoto, 2007b)。そもそも二重提喩として説明できるかどうか以前に、このような隠喩自体の成立のメカニズムがよくわかっていない。また、(6)のような概念メタファーが「何が媒介項かはっきりしないため、やはり二重の提喩とは処理できないだろう(森, 2007, p.168)」という批判についても、<感情は液体である>という概念メタファーそのものが二重提喩で処理できないという意味であれば、そもそも概念メタファーはアナロジー(analogy, analogical mapping)であって隠喩ではない(内海, 2001)のでの外的指摘であるし⁸⁾、概念メタファーの言語的表出としての隠喩表現(「相手の気持ちを汲む」や「愛情をそそぐ」など)について述べているのであれば、前述した述部に比喩性を持つ隠喩と同じように本当に説明できないのかは必ずしも定かではない。さらに、(7)のように複数の隠喩が組み合わさっているような場合(心を建物・部屋にたとえる隠喩やそれに基づく動詞句の隠喩)でも、上記と同じ議論を適用できるであろう。説明対象の表現よりも説明そのもののほうが理解が困難という

⁷⁾佐藤(1978)も二重提喩論をかなり肯定的に評価している。「その理論(二重提喩論)は、換喩に関しては少々無理があるが、じつは、隠喩については九割かた当たっており、その鋭い着想は評価されなければならない。(ibid., p.200)」

⁸⁾隠喩はあるものを別のものでたとえる文彩(言語表現)であって、概念間の写像関係は隠喩ではない。この点において、概念メタファーは隠喩ではない(もちろんアナロジーとしての概念メタファーが隠喩表現の理解の基盤となっていることは否定しない。)グループμが二重提喩として説明しようと試みたのはまさに言語表現としての隠喩であるので、概念メタファーが二重提喩で説明できないという批判は議論がかみ合っていないと言える。

批判に至っては、眼でものを見るよりもその原理(どのようにして眼でものが見えるのか)を理解するほうが困難だからその原理が間違っていると主張するのと同じくらいナンセンスであると指摘するだけで十分である。

一方、後者の批判(二重提喩で説明できる非隠喩表現の存在)については、多くの研究者によって指摘されている隠喩文と字義文の連続性(Glucksberg & Keysar, 1990)を考えると何ら不思議ではない。さらに4.1節で後述するように、(9)のような字義文を二重提喩とみなすこと自体が実は不適切である。

3 隠喩理解の認知理論

3.1 隠喩の構造

すべての隠喩は喩辞(たとえるものごと, vehicle)と被喩辞(たとえられるものごと, tenor)から構成される。そこで喩辞・被喩辞の種類によって、隠喩を以下のように分類することができる⁹⁾。

- 人, 物, 事: おもに名詞によって表されるので, 名詞隠喩(nominal metaphor)と呼ぶ。
- 動作, 状態, 性質: 人・物・事を項(引数)として取る n 項関係で表される。これらを喩辞・被喩辞とする隠喩を述語隠喩(predicative metaphor)と総称する。
 - 動詞によって表される行為や動作などが被喩辞となる隠喩を動詞隠喩(verb metaphor)と呼ぶ。
 - 形容詞(形容動詞)によって表される性質や状態が被喩辞となる隠喩を形容詞隠喩(adjective metaphor)と呼ぶ。

この他にも、「猿も木から落ちるとはまさにこのことだ」という表現のように、ある状況や場面をたとえる隠喩(「このこと」で表される状況が「猿も木から落ちる」という状況でたとえられている)も存在する。ただしこのような表現は諷喩(allegory)として隠喩とは別に扱われる場合も少なくないので、本論考でもとりあえず分析の対象とはしない。

隠喩には、喩辞と被喩辞の両方が明示される場合と、喩辞のみが明示される場合が存在する。名詞比喩の場合には、(10)のように両方が明示される形式が最も基本的であり、(11)のように喩辞そのものを指示的に用いると、喩辞のみが明示される隠喩となる。

⁹⁾以下に述べる分類では品詞を基準とした名称を用いているが、喩辞・被喩辞の品詞が隠喩理解を考える上で本質的に重要であると主張しているわけではないことに注意されたい。例えば、中本・黒田・楠見(2006)は、喩辞が対象名を表す名詞(e.g., 柴犬)の場合と役割名を表す名詞(e.g., 番犬)の場合では、隠喩形式への選好が異なることを示しているが、この知見は同じ語彙カテゴリー(品詞)の喩辞でも隠喩の理解過程が異なる可能性を示唆している。

(10) あの男は狼だ。

(11) 狼が襲いかかってきた。

これに対して、ほとんどすべての述語隠喩では、喩辞のみが表現上に現れることになる。これは、多くの述語隠喩において被喩辞をことばで表現することが不可能だからであり、だからこそのことばを比喩的に転用した隠喩表現を用いているのである。そして、このことが述語隠喩における議論の混乱(被喩辞と主題を正しく区別・同定していないことによる誤謬)を招いている。例えば、前述した述語隠喩(5)では、喩辞が「煮えたぎる」であり、被喩辞はそれによってたとえられる怒りの状態である。つまり、隠喩(5)は以下のような構造を持つと考えることができる。

(5') 怒り(δ)が α という状態は、 γ が煮えたぎる(β)という状態である。

よって、述語隠喩の被喩辞は α であり、隠喩文の主題 δ である「怒り」は被喩辞ではない¹⁰⁾。これは以下のような形容詞に比喩性を持つ形容詞隠喩でも同様である。

(12) 赤い声(声が赤い)

(12') 声(δ)が α という性質は、 γ が赤い(β)という性質である。

したがって、述語隠喩が二重提喩で説明できるかどうかは、ことばで表されていない(表すことのできない)被喩辞 α と、隠喩に明示されている喩辞 β (動詞や形容詞)の関係を二重の提喩で説明できるかどうかということである。二重提喩論への批判はこのことをきちんと捉えていないために、信頼できない議論となっている。

3.2 カテゴリー化理論

Glucksberg たち(Glucksberg, 2001, 2003; Glucksberg & Keysar, 1990)は、喩辞・被喩辞ともに明示されている「 α は β である」形式の名詞隠喩を対象として、カテゴリー化に基づく理解過程モデルを提案している。この理論では、以下の二つのステップにより隠喩が理解されるとする。

1. 喩辞 β を典型事例とするカテゴリー C が生成/想起される。
2. 被喩辞 α がそのカテゴリー C に属するものとみなされる。

最初のステップは、喩辞を典型事例とするカテゴリー C を生成する過程である。後述するように、隠喩として使った古された慣習的な表現では、すでに長期記憶(語の意

¹⁰⁾橋元(1989)は、「怒りが煮えたぎる」を「怒りは γ である」と「 γ は煮えたぎる」の二つの文に分解して分析できるとしている。述語隠喩を考える上で γ (煮えたぎるもの)に注目している点は、4.3節で論じるように一部の述語隠喩の理解過程を考える上で非常に有効であるが、述語隠喩の構造(被喩辞は「怒り」ではなく α であり、喩辞は「煮えたぎる」である)は正しく捉えられていない。

味の一部)として蓄えられているカテゴリーがただ想起されるだけという可能性も考えられるが、多くの隠喩表現ではカテゴリーが新たに生成される(このようなカテゴリーをアドホックカテゴリー (Barsalou, 1983) と言う)カテゴリーを形成する特徴や性質は主に喩辞 β に依存して決められるが、被喩辞 α はどの次元(属性)を強調するかを制約する。その結果、「 α は β である」という隠喩表現は、作成・想起されたカテゴリー C のメンバが被喩辞 α であることを述べている表現と解釈される。例えば、隠喩文(10)では、喩辞である「狼」から「獰猛で危険な生き物」というカテゴリーが想起され、「あの男」で指示される人物がそのようなカテゴリーに当てはまる人物であると解釈される¹¹⁾。

カテゴリー化理論の利点は、隠喩表現も字義表現も同様の枠組で説明可能であるという点である。字義表現の場合には、 β に該当する名詞が字義通りの意味であるカテゴリーを指している(例えば(9)の「人間は動物である」の「動物」はまさに文字通りの意味でカテゴリー《動物》を指している)のに対し、隠喩表現の場合には、そのカテゴリーを指し示すことばがないので、喩辞 β を援用してカテゴリーを比喩的に(まさに提喩的に)指示している。

さらに、Glucksberg (2001, 2003)はこの考え方が述語隠喩(動詞隠喩)にも適用できると主張している。名詞隠喩の喩辞がものごとに関するカテゴリーを想起させるのと同様に、動詞隠喩の動詞は行為に関するアドホックカテゴリーを想起させると考えるのである。例えば、以下の文では、動詞‘fly’によって「(具体物・抽象物に関わらず)高速で移動/伝搬する」という抽象化された行為のカテゴリーが想起される。

(13) John hopped on his bike and flew home.
(ジョンはバイクに飛び乗って、家に飛んで帰った)

(14) The rumor flew through the office.
(そのうわさはオフィスじゅうを飛び回った)

しかし、この説明は述語隠喩の理解過程としては不十分である。なぜならば、被喩辞と想起されたカテゴリーの間の関係についてきちんと言及していないからである。名詞隠喩との類似性を考えるのであれば、述語隠喩の(明示されていない)被喩辞 α とカテゴリーの関係をきちんと考えるべきであるが、どちらかと言うと、Glucksbergらはそのカテゴリーが表す抽象的な動作・行為が、文の主題 δ (topic, 上記の例だと‘he’や‘rumor’)

の動作・行為をそのまま表すと考えているようである(e.g., Torreano, Cacciari, & Glucksberg, 2005)。

3.3 比較理論との融合による新たな隠喩理論

Gentner (1983, 1989)は、名詞隠喩の喩辞・被喩辞間の要素(特徴や構造)のアラインメント(対応付け; alignment)とそれに続く対応付けされた要素の被喩辞への写像という2つの過程から成る比較(comparison)過程を通じて隠喩は理解されるとする比較理論を主張している。比較理論によれば、例えば「うわさはウイルスだ」という隠喩では、うわさとウイルスの間に見られる顕現的な対応付け(例:伝染や感染に関する対応付け)が発見され、そこから得られる特徴や構造が被喩辞である「うわさ」に写像される。

しかし、聞き手が被喩辞に関する情報をあまり持っていない場合(つまり、隠喩によって被喩辞の特徴や性質を新情報として述べる場合)には喩辞と被喩辞の間の対応付けができないため、比較過程によって隠喩理解が行われるとは考えにくい。例えば、(10)の「あの男は狼だ」という隠喩を理解するのに、「あの男」がどのような男なのかを全く知らなくても十分に理解は可能である。逆に、カテゴリー化理論が想定するように、「狼」でたとえることによって「あの男」に関する情報を新たに得ると考えたほうが妥当である¹²⁾。

カテゴリー化理論と比較理論のどちらが正しいかという議論は現在でも行われているが、最近では、これらの理論を融合した隠喩理論が提案されている。Bowdle & Gentner (2005)は喩辞の慣習性(conventionality)がどちらの過程で理解されるかを決定するという隠喩の履歴(career of metaphor)理論を主張している。この理論では、隠喩は基本的に比較過程を通じて理解されるが、比喩的な意味が喩辞の持つ意味として慣習化されるとカテゴリー化過程として理解される(つまり、喩辞の字義の意味としてカテゴリーを指し示す)と考える。一方、Glucksberg & Haught (2006)やJones & Estes (2006)は、隠喩は基本的にカテゴリー化として理解されるが、適切性(aptness)の低い隠喩では、比較過程で理解されると考える(適切性理論)。

これらの理論に対して、筆者(Utsumi, 2006, 2007)は解釈の豊かさを表す解釈多様性(interpretive diversity)がどちらの過程で隠喩が理解されるかを決定すると主張する。この解釈多様性理論では、多様性の高い豊かな解釈が可能である隠喩はカテゴリー化過程を通じて理

¹¹⁾言語コミュニケーションの代表的な理論である関連性理論でも、名詞隠喩の理解に関してカテゴリー化理論とほぼ同じ見方をしている(Carston, 2002; Wilson & Sperber, 2004)。カテゴリー理論と異なる点は、喩辞からアドホックカテゴリーを生成する際に被喩辞(主題)が積極的に関与するのを認める点である。

¹²⁾カテゴリー化過程と比較過程の大きな違いに、理解初期における対称性(ここで言う「対称」とは喩辞と被喩辞が逆になってもその過程から得られる結果が変化しないという意味で用いている)の違いがある。カテゴリー化は喩辞からアドホックカテゴリーを生成するので、最初の段階から非対称である。しかし、比較の初期段階のアラインメント過程は対称である。

解されるのに対して、解釈多様性の低い隠喩は比較過程によって理解されると考える。解釈多様性理論の他の理論に対する優位性は心理実験と計算機シミュレーションを通じて示されている。

3.4 二段階カテゴリー化理論

以上のように、名詞隠喩に関しては多くの研究が行われ知見が蓄積されているが、述語隠喩の理解過程についてはほとんど研究が行われていない。わずかに Glucksberg のカテゴリー化理論による不十分な仮説や、動詞隠喩におけるカテゴリー化理論の妥当性を実験的に調べた中村・内海 (2007) の研究があるだけである。

そのような現状に対して、内海と坂本 (内海・坂本, 2006; Utsumi & Sakamoto, 2007a, 2007b) は述語隠喩の理解過程は二段階のカテゴリー化によって理解されるとする二段階カテゴリー化理論を提案している。二段階カテゴリー化理論では、喩辞 β である動詞・形容詞と想起されるアドホックカテゴリー C の関係は、カテゴリー化理論が考えるような直接的なものではなく、仲介カテゴリー (intermediate category) を介した間接的な関係であると考えられる。つまり、喩辞 β (動詞・形容詞) から仲介カテゴリーが想起され、そのカテゴリーと主題 δ (名詞) との相互作用から最終的に主題に適用されるカテゴリー C が想起されるという二段階のカテゴリー化を考える。

この理論は Glucksberg のカテゴリー化理論の不備を補う形で提案され、計算機シミュレーションを通じて、述語隠喩の理解過程として他の理論よりも優れていることが示されている。しかし、この理論についても、いくつかの (概念上の) 問題点が見受けられる。ひとつには、仲介カテゴリーを介してアドホックカテゴリー C を想起する過程が「カテゴリー化」ではないという問題がある。例えば (12) の「赤い声」という隠喩の理解過程は以下のように説明される。

まず喩辞である「赤い」が「血、火、情熱、りんご、危険」などを含む「赤いもの」というような仲介カテゴリーを想起する。そして仲介カテゴリーのメンバのうちで被喩辞である「声」と関連性がある「血、情熱、危険」などが選ばれて、これらから「怖い、危険な、叫び声のような」という性質からなるアドホックカテゴリーが想起され、被喩辞に写像されることになる。(内海・坂本, 2006, p.14)

しかし、ここで言う仲介カテゴリーは「赤いもの」の事例集合であり、カテゴリーではない。さらに「赤い」から「赤いもの」のカテゴリーが想起されるという表現も

不自然である。したがって、カテゴリー化が二段階で生じるという説明は不適切である¹³⁾。また、想起されたカテゴリー C と被喩辞 α をきちんと区別していないというカテゴリー化理論と同様の問題点も抱えている。

このような問題点が存在するにも関わらず、次章で論じるように、二段階カテゴリー化の考え方は述語隠喩の理解過程を考える上で非常に重要であり、さらにこの考え方を基盤として、述語隠喩は二重の提喩で説明可能であることが示されることになる。

4 二重提喩論再考：新たな隠喩理論に向けて

ここまでの長い議論をふまえて、隠喩の二重提喩論を再検討する。そして、すべての隠喩は二重提喩 (二段階の提喩的操作) で理解されることを示し、新たな隠喩理論に向けての枠組を提示する。

4.1 カテゴリー化理論と二重提喩の関係：名詞隠喩は $(Sg+Sp)\Sigma$ 型の二重提喩で説明できる

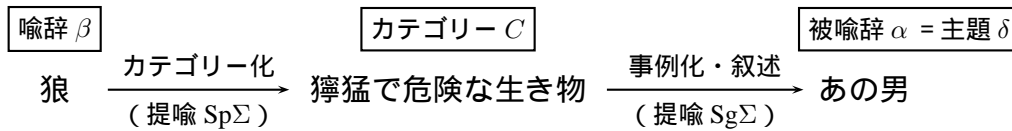
今までの議論や図 1(a) から明らかなように、カテゴリー化理論と二重提喩には以下のような関係がある。

1. 喩辞 β でカテゴリー C を想起させるということは、まさに種類関係に基づく特殊化の提喩 ($Sp\Sigma$ 型) と同じである。
2. 「 α は β である」という隠喩の場合には、カテゴリー C で被喩辞 α を表しているわけではないが、被喩辞 α が明示されない隠喩の場合には、 C が α の提喩 ($Sg\Sigma$ 型) であるとみなしてもそれほど不自然ではない。

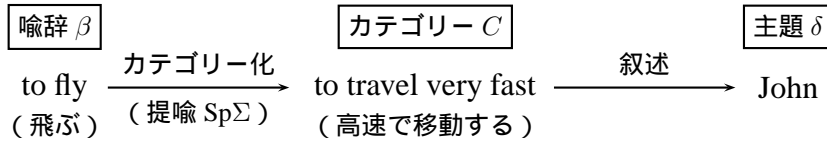
要するに、カテゴリー化理論が述べていることは、名詞隠喩は $(Sg+Sp)\Sigma$ 型の二重提喩に基づいて理解されるということである。

名詞隠喩と同じ形式の字義表現 (e.g., (9)) も二重提喩で説明できてしまうという 2.3.3 節で論じた批判の妥当性については、図 1(a) における喩辞 β からカテゴリー C が想起される過程を $Sp\Sigma$ 型の提喩と考えられるかどうか依存している。「人間は動物である」という字義表現の「動物」は《動物》カテゴリーを文字通りの意味で指示しているため、これは提喩ではない。一方、喩辞が名称を持っていないアドホックカテゴリーを指示するのは提喩である。したがって、「 X は Y である」という文の Y があるカテゴリーを指示するという点においては隠喩表現と字義表現の連続性 (同一性) が認められるが、 Y が提喩としての機能を果たしているかどうかによって、隠喩と字義表現の区別ができるのである。

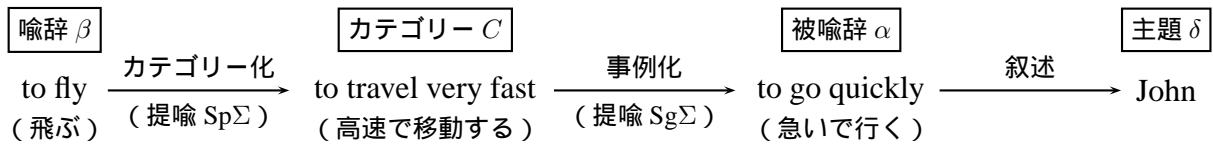
¹³⁾二段階カテゴリー化理論で提示されている過程が (二段階) カテゴリー化ではないことは、2007 年の京都大学での筆者の講演時に、すでに黒田航氏によって指摘されている。



(a) Glucksberg のカテゴリー化理論による名詞隠喩 (10) の説明



(b) カテゴリー化理論による述語隠喩 (13) の不適切な説明



(c) 二段階カテゴリー化理論による (二段階ではないが) 適切な説明

図 1: (Sg+Sp)Σ 型の二重提喩による理解過程とカテゴリー化理論・二段階カテゴリー化理論との関係

なお、二重提喩論は、比較理論やその他の融合理論とも矛盾しない¹⁴⁾。比較理論や融合理論が主に論じているのはどのようにしてアドホックカテゴリーが生成されるかであるが、二重提喩論はこの点に関しては中立である。また、これらの理論は、生成されたカテゴリーを通じて隠喩が二重提喩として理解されることを排除しない。

4.2 述語隠喩の一部は (Sg+Sp)Σ 型の二重提喩で説明できる

3.1 節で述べたように、述語隠喩 (13) の構造は以下のようになる。

- (13) John hopped on his bike and flew home.
 (13') John (δ)'s action of α (\approx going quickly) is γ 's action of flying (β).
 (ジョン δ の α するという行為は、 γ が飛ぶ β という行為である)

よって述語隠喩の理解過程は、喩辞 'fly' から被喩辞 α を導く過程と言い換えることができる。果たしてこの過程を二重提喩で説明できるであろうか。

この問題に対して、3.2 節で述べたように、カテゴリー化理論は図 1(b) のように考える。すなわち、喩辞 'fly'

から「具体物/抽象物が高速に移動・伝搬する」という抽象的動作のカテゴリーが生起して、それを被喩辞 α とみなすという構造である。つまりアドホックカテゴリーと被喩辞を区別していない、言い換えれば、喩辞から被喩辞が直接想起されるという理解過程である。

しかしこの説明は明らかに間違いである。喩辞 'fly' によって表現されている動作は「飛んでいくほど早く急いで行く」というような被喩辞 α であって、「高速での移動」という抽象的な動作ではない。喩辞と被喩辞がともに抽象的な動作カテゴリーのメンバ(事例)なのである。したがって、(13') を名詞隠喩と考えてカテゴリー化理論をそのまま適用すれば正しい理解過程が得られる。この過程を図示したのが図 1(c) であり、この図から述語隠喩においても名詞隠喩と同様の (Sg+Sp)Σ 型の二重提喩が成立していると言える。ただし、名詞隠喩の理解において被喩辞 (= 主題) がカテゴリー化に影響を与える(どの属性を強調するかを制約する)のと同様の働きを述語隠喩の主題 δ が担っているかどうかは定かではないが、何らかの影響を与えていることは確かであろう。なお、図 1(c) の過程は、「二段階カテゴリー化」という名称は不適切であるが、Utsumi & Sakamoto (2007b) が二段階カテゴリー化理論の中で想定している理解過程と同じである。

喩辞や被喩辞の動作・行為を抽象化したカテゴリーが想定できるかどうか疑問に思う向きもあるかもしれない。二重提喩の批判者が最も問題とする点であろう。しかし、例えば Schank (1975) は彼の概念依存理論の中で、動作を 11 個の意味素(例: 物理的なものの移動

¹⁴⁾2.3.3 節で、Lakoff & Johnson (1980) の概念メタファーは隠喩表現ではないので二重提喩で説明する必要がないと述べたが、概念メタファーは起点領域(喩辞)と目標領域(被喩辞)の両方に共通する抽象的な概念構造を想定していない点で、そもそも二重提喩論と相容れない。しかし、まさにこの点から概念メタファーを批判する研究(e.g., Rudzka-Ostyn, 1995)もあることを指摘しておく。これに対して、Fauconnier & Turner (2002) の概念混合理論 (conceptual blending theory) は両領域に共通する抽象化スペース(領域, カテゴリー)を想定する点で、二重提喩論と互換性があると考えられる。

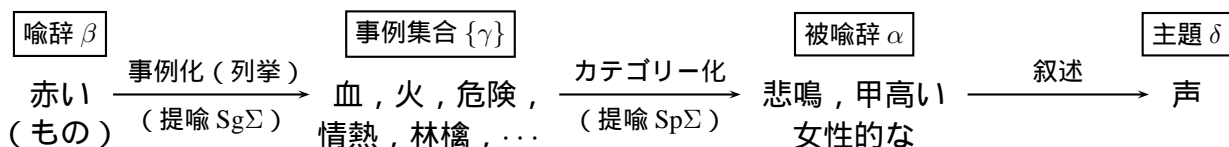


図 2: (Sp+Sg)Σ 型の二重提喩による述語隠喩の理解過程：形容詞隠喩 (12) を例として

PTRANS, 抽象的なものの移動 ATRANS, 体内に取り込む INGEST) の組み合わせによって表すことを試み, ある程度の成功を得た. このような記述が人工知能の初期に考えられたということは, 多くの動作や行為は何らかの抽象化が可能であることを示唆している.

述語隠喩には以下の例のように γ (喩辞の行為主体) を明示するタイプの表現も存在する.

- (15) I float like a butterfly, sting like a bee.
(蝶のように舞い, 蜂のように刺す)

これは伝説のプロボクサーであるモハメド・アリが自分のボクシングスタイル (ヘビー級にも関わらず華麗なフットワークと鋭い左ジャブを多様化したスタイル) を比喩的に表現したことばである. この例においても, 「蝶のように舞う」とか「蜂のように刺す」と行った喩辞とアリのリング上でのフットワークやパンチという被喩辞が, 抽象的な動作カテゴリーによって結び付いていると考えられる. 特に, 行為主体を明示することは, 喩辞となっている行為を限定して, その行為を典型的な事例とするカテゴリーを想起しやすくする働きがあると考えられる.

4.3 残りの述語隠喩 (特に形容詞隠喩) は (Sp+Sg)Σ 型の二重提喩で説明できる

次に問題となるのが, すべての述語隠喩が図 1(c) のような (Sg+Sp)Σ 型の二重提喩で説明できるか, 言い換えれば, 喩辞や被喩辞よりも抽象的なアドホックカテゴリーを必ず想起できるか, という点である.

おそらくこれは不可能であろうというのが本論考での立場である (動詞によって表される) 行為・動作はまだしも, 性質や状態となってくるとこのような抽象化は容易に想定できない. 例えば, (5) の隠喩の場合に「煮えたぎる」という状態を典型的事例として含む, より抽象的なカテゴリーを想定できるであろうか. 「ぼこぼこ音を立てて液体が気化していく様子」を抽象化して, 「液体 / 抽象物に関わらず激しく沸き上がっていき, 臨界点に達する様子」というようなカテゴリーを想像できないことはないが, ‘fly’ による隠喩に比べて不自然さが増すことは否めない. 「赤い声」のような形容詞隠喩では, そもそも「赤い」という性質が十分に抽象的な概念であるので, それをより抽象化した上位カテゴリーを想起するのはほぼ不可能である¹⁵⁾. もはや「性質全体」

というような意味のないカテゴリーを想起するしかない. したがって, これらの述語隠喩は, (Sg+Sp)Σ 型の二重提喩として説明することはできない.

このような隠喩に対しては, 3.4 節で述べた二段階カテゴリー化理論の (二段階カテゴリー化ではないと本論考で断じた) 説明が適用できるかもしれない. すなわち, 喩辞からカテゴリーを想起するのではなく, 図 2 に示すように喩辞 β を「赤いもの」というカテゴリーとみなして, その事例集合 $E = \{\gamma\}$ を生成する. そして, その事例集合に共通する, 喩辞とは別の特徴を取り出すことによって新たなカテゴリーを生成し, それを被喩辞 α とするという理解過程を想定するのである.

喩辞の事例化に基づく図 2 の理解過程において主題 δ がどのような役割を果たすかは, 解決しなければいけない重要な問題である. 可能性としては, 喩辞 β から事例 γ を列挙するとき, 事例集合 $E = \{\gamma\}$ から被喩辞 α のカテゴリーを生成するときに, 主題 δ が影響を及ぼす可能性がある. 被喩辞となる性質は主題を叙述できるような性質でなければいけない (意味がない) という点で, 少なくとも後者の過程には関与していると考えられる. 「声」を修飾・叙述できない性質は被喩辞を構成するカテゴリーには含まれないはずである. さらに, 赤いものを列挙する際に, 声に関係のあるものごとを優先的 (選択的) に列挙するという処理も十分に考えられる.

事例集合の生成は, 類 (カテゴリー) で種 (その事例) の集合を表しているという意味で, 一般化の提喩 (SgΣ) の拡張と考えることができる (ひとつのカテゴリーでひとつの事例を表すのが通常の提喩であるが, ここでは事例集合を表しているという点で拡張という言い方をしている). 一方, 事例集合から (性質・特徴に関する) 新たなカテゴリーを被喩辞として生成する過程は, 種 (事例) で類 (カテゴリー) を表す特殊化の提喩 (SpΣ) の拡張とみなすことができる. したがって, 図 2 で説明される述語隠喩は, (Sp+Sg)Σ 型の二重提喩であるとみなすことができる.

グループ μ の二重提喩論では, (Sp+Sg)Σ 型の二重提

¹⁵⁾ おもに形容詞によって表されるような性質や特徴に共通する抽象的な構造として, 少数の抽象的次元 (e.g., 評価, 活動性, 潜在力) Osgood (1980), 梶見 (1988) が存在することが指摘されており, これらが喩辞によって想起されるという考え方は不可能ではない. 実際にこのような構造を利用した隠喩理解の計算モデル (Utsumi, Hori, & Ohsuga, 1998; 内海, 2000) も提案されている.

喩は隠喩を構成しないものとされていた(表1参照)。彼らは、このタイプの例として、「樺」を仲介項(I)として「しなやか」で「緑色」を表す場合を挙げている。確かに、「しなやか」と「緑色」の両特徴が「樺」で成立することだけから、「しなやか」と「緑色」が類似しているとは到底言えないだろう。つまり、(Sp+Sg) Σ 型の二重提喩は、ある概念(ものごと)が喩辞と被喩辞の両方を特徴として持つというだけで、喩辞と被喩辞が類似していると主張しているに等しい。これに対して、カテゴリー(類)とひとつの事例(種)の関係を拡張してカテゴリーと事例集合の関係を基盤として隠喩を考えたのが図2であり、これを本論考では(Sp+Sg) Σ 型の二重提喩と呼んでいる。したがって、厳密には図2の理解過程は二重提喩とは言えない。しかし、複数の事例に共通して成立しているふたつの特徴が類似していると言っても、先ほどの場合に比べてそれほど抵抗はないであろう。もし、複数のものが「しなやか」と「緑色」の両特徴を備えていれば、「しなやか」と「緑色」はある意味で類似していると言っても過言ではない¹⁶⁾。

このように事例化の過程を通じて理解される隠喩においては、 γ (喩辞の示す特徴や状態が成り立つものごと)を明示することによって、その理解過程にどのような影響を与えるのであろうか。

- (16) a. 血のように赤い声
- b. 炎のように赤い声

(Sg+Sp) Σ 型の二重提喩(カテゴリー化)に基づいて理解される(15)のような隠喩の場合には、動作や行為を限定することによってカテゴリー化が促進されると4.2節では述べた。上記の隠喩の場合には、「~のように」で具体的なものを指定することによって、喩辞の事例として想起しやすい場合(例えば、(16a))には理解は促進されるが、喩辞の事例として想起しにくい場合(例えば、(16b))には理解は抑制されると予想できる。いずれにしても、このような表現を実験に用いることによって、図2で示す隠喩理解過程の心理学的妥当性に関して重要な知見をもたらすであろう。

4.4 二段階カテゴリー化理論から新たな隠喩理論へ

3.4節や本章の議論から明らかになったのは、内海・坂本(2006)やUtsumi & Sakamoto(2007a, 2007b)が提案していた「二段階カテゴリー化」は、その名称自体は不適切であったものの、述語隠喩を含む多様な隠喩の理解過程を説明できる極めて重要な概念であるということである。その内容を要約すれば、名詞隠喩や述語隠喩を含むすべての隠喩は、喩辞 β からカテゴリー C または事例集合 $\{\gamma\}$ を導出し、さらにそこから被喩辞 α を導出することによって理解されるということである。二重提喩との関係で考えると、(Sg+Sp) Σ 型の隠喩

は $\beta \rightarrow C \rightarrow \alpha$ (カテゴリー化・事例化)という理解過程にしたがい、(Sp+Sg) Σ 型の隠喩は $\beta \rightarrow \{\gamma\} \rightarrow \alpha$ (事例化・カテゴリー化)という理解過程にしたがうことになる。

以上で示してきた隠喩理解に関する理論は、カテゴリー化・事例化理論(categorization-instantiation theory)とでも呼ぶべき新たな理論であり、その妥当性や詳細については心理実験、計算機シミュレーション、コーパス分析などの多角的手法を用いて検証していくことが必要である。

5 おわりに

本論考では、最新の隠喩理論との比較において、グループ μ の二重提喩論を肯定的に再検討し、多様な隠喩(名詞隠喩や述語隠喩)は二重提喩で説明できることを

¹⁶⁾形容詞隠喩における喩辞と被喩辞の類似性の問題は、実はそれほど単純ではない。例えば、実験参加者に「赤い声」の解釈を求めると「悲鳴、叫ぶような、恐怖心を煽る、甲高い」といった解釈が得られる(坂本・内海, 2007)。ここで、喩辞である「赤い」という性質と「叫ぶような」や「甲高い」といった被喩辞の性質が似ていると本当に言えるのであろうか。少なくとも「噂」と「ウイルス」が似ている、もしくは「fly」と「go quickly」が似ている(これはおおよそ意味的類似性と呼べる類似であろう)という感覚とは、異なる感覚であるようにも思える。「類似している(similar)」よりも「関連している(associated)」と言うほうが近いかもしれない。もし類似していると言えないのであれば、隠喩が類似性に基づく修辞であるという定義をそのまま認めるとすと、図2で示される過程で理解される形容詞隠喩は隠喩とは言えないのかもしれない。

形容詞隠喩に内在する類似性に関するこの議論は、形容詞隠喩は類似に基づく(resemblance-based)隠喩と共起に基づく(correlation-based)隠喩の二種類に分類することができるという議論(Sakamoto & Utsumi, 2008; Utsumi & Sakamoto, 2008)と密接に関係する。共起に基づく隠喩は、以下の例のように、喩辞と被喩辞(後述するように、必ずしも何を被喩辞とするかは明確ではない)の関係が認知主体の経験における共起性に基づいている。

- (17) おいしい秋
- (18) おいしいレストラン

「おいしい秋」は概して「おいしい食べ物豊富にある秋」というような意味を表しているが、これは秋とおいしい食べ物(旬の味覚)が我々の経験上結びつくからである。言い換えれば、「おいしい」という性質(喩辞)と「おいしい食べ物豊富にある」という秋の持つ性質(被喩辞)の関係は近接性に基づく、すなわち換喩的(metonymic)である(瀬戸, 1997)。よって、類似性に基づく隠喩の定義を当てはめると、ここで共起に基づく隠喩と呼ばれる表現はもはや隠喩ではないということになる。「おいしいレストラン」という表現に至っては隠喩らしさはほとんど消失し、「おいしい料理を出すレストラン」という意味の換喩にしか感じられない。

この議論を突き詰めていくと、「赤い声」のような類似に基づく隠喩(事例集合を介して喩辞と被喩辞が結び付いている図2の隠喩)も同様に換喩的と考えることもできる。喩辞「赤い」の事例化によって導かれた事例集合「血、火、危険」などを思い浮かべる状況(例えば、事故、事件、災害などの赤い血を見る状況)では、叫び声や悲鳴などの甲高い声が聞こえる可能性が高いと考えられる。すなわち、事例集合を介して喩辞と被喩辞が結び付いている図2の隠喩でも、事例集合が生起・出現する状況を考えれば、喩辞の性質と被喩辞の性質が共起していると言うことができる点で、喩辞と被喩辞の関係は換喩的である。すなわち図2の隠喩はすべて隠喩ではなく、換喩であるという議論も成り立つであろう。

なお、認知言語学においてもこのような事例に関する判断はゆれているようである。例えば、Taylor(2003)は多くの共感覚比喩(例: loud color, sweet music, black mood)では喩辞と被喩辞の関係を共起性(近接性)に還元できないとしているのに対して、谷口(2003)は経験的な共起性に基づくと思われる共感覚比喩は少なからずであると述べている(例: 甘い香り, こうばしい音, 固い音)。

示した。また、この再検討の過程を通じて、カテゴリー化理論や二段階カテゴリー化理論を包括する、隠喩の理解過程に関する新たな新たな理論の枠組を提示した。

本論考の考察・議論は以下のようにまとめることができる。

- 提喩は、類種関係 (Σ 型, カテゴリー関係) に基づく文彩である。全体部分関係 (Π 型) に基づく転義は提喩ではなく換喩である。
- 隠喩は二重提喩という概念で説明可能であるという点で、グループ μ の二重提喩論を支持する。ただし、二重提喩論と異なり、隠喩として成立する二重提喩のタイプは、 Σ 型の二パターン ($(Sg+Sp)\Sigma$ 型と $(Sp+Sg)\Sigma$ 型) であると主張する。
- 多くの名詞隠喩と一部の述語隠喩 (動詞隠喩) は、 $(Sg+Sp)\Sigma$ 型の二重提喩 (カテゴリー化 事例化) として説明できる。
- 一部の述語隠喩 (一部の動詞隠喩と形容詞隠喩) は、 $(Sp+Sg)\Sigma$ 型の二重提喩 (事例化 (事例列挙) カテゴリー化) として説明できる。
- Glucksberg のカテゴリー化理論による説明は、本質的に $(Sg+Sp)\Sigma$ 型の二重提喩による説明と同値である。ただし、述語隠喩に対するカテゴリー化理論の説明は間違いであり、名詞隠喩と同様に $(Sg+Sp)\Sigma$ 型の二重提喩として理解できる。
- 内海・坂本の二段階カテゴリー化理論の主張は、述語隠喩が $(Sg+Sp)\Sigma$ 型や $(Sp+Sg)\Sigma$ 型の二重提喩で捉えられるという主張と同値である。ただしそれらの理解過程は二段階のカテゴリー化ではないので、「二段階カテゴリー化」という名称は不適切である。

今後の課題として、本論考で提示した隠喩理解の理論 (カテゴリー化・事例化理論) の精緻化やその妥当性の検証が早急に求められる。

謝辞 本研究は、科学研究費補助金 (基盤研究 (C), No. 20500234) の援助を受けている。また、本研究の一部のアイデアは、共同研究者の坂本真樹氏との議論に触発されて得られたものである。ここに記して感謝を表す。

参考文献

- Barsalou, L. (1983). Ad hoc categories. *Memory & Cognition*, 11(3), 211–227.
- Bowdle, B. & Gentner, D. (2005). The career of metaphor. *Psychological Review*, 112(1), 193–216.
- Carston, R. (2002). *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Blackwell Publishing.
- Evans, V. & Green, M. (2006). *Cognitive Linguistics: An Introduction*. Edinburgh University Press.
- Fauconnier, G. & Turner, M. (2002). *The Way We Think: Conceptual Blending and The Mind's Hidden Complexities*. Basic Books.
- Gentner, D. (1983). Structure mapping: A theoretical framework for analogy. *Cognitive Science*, 7, 155–170.
- Gentner, D. (1989). The mechanisms of analogical learning. In Vosniadou, S. & Ortony, A. (Eds.), *Similarity and Analogical Reasoning*, pp. 199–241. Cambridge University Press.
- Glucksberg, S. (2001). *Understanding Figurative Language: From Metaphors to Idioms*. Oxford University Press.
- Glucksberg, S. (2003). The psycholinguistics of metaphor. *Trends in Cognitive Sciences*, 7(2), 92–96.
- Glucksberg, S. & Haught, C. (2006). On the relation between metaphor and simile: When comparison fails. *Mind & Language*, 21(3), 360–378.
- Glucksberg, S. & Keysar, B. (1990). Understanding metaphorical comparisons: Beyond similarity. *Psychological Review*, 97, 3–18.
- Group μ (1970). *Rhétorique générale*. Paris: Librairie Larousse. 佐々木 健一, 樋口 桂子 (訳) (1981). 一般修辞学, 大修館書店.
- 橋元 良明 (1989). 背理のコミュニケーション: アイロニー, メタファー, インプリケーチャー. 勁草書房.
- Jones, L. & Estes, Z. (2006). Roosters, robins, and alarm clocks: Aptness and conventionality in metaphor comprehension. *Journal of Memory and Language*, 55, 18–32.
- 楠見 孝 (1988). 共感覚に基づく形容表現の理解過程について — 感覚形容語の通様相的修飾 —. *心理学研究*, 58, 373–380.
- Lakoff, G. (1987). *Women, Fire, and Dangerous Things*. The University of Chicago Press. 池上 嘉彦 他 (訳) (1993). 認知意味論, 紀伊国屋書店.
- Lakoff, G. & Johnson, M. (1980). *Metaphors We Live By*. The University of Chicago Press. 渡辺 昇一, 楠瀬 淳三, 下谷 和幸 (訳) (1986). レトリックと人生, 大修館書店.
- 森 雄一 (2007). 隠喩・提喩・逆隠喩. 楠見 孝 (編), メタファー研究の最前線, pp. 159–175. ひつじ書房.

- 中本 敬子, 黒田 航, 楠見 孝 (2006). 喩辞名詞の意味的特性が隠喩形式選好に与える影響 - 意味役割理論にもとづく役割名と対象名の区別から -. 日本認知科学会第 23 回大会論文集, pp. 390–395.
- 中村 磨紀登, 内海 彰 (2007). 動詞による比喩の理解過程の実験的検討. 日本認知科学会第 24 回大会論文集, pp. 154–155.
- 野内 良三 (2002). レトリック入門. 世界思想社.
- 小田 淳一 (2007). 表現法の変遷 — ラテン修辞学からグループ μ へ. 認知科学, 14(3), 253–268.
- 小倉 久和, 小高 知宏 (2001). 人工知能システムの構成. 近代科学社.
- Osgood, C. (1980). The cognitive dynamics of synesthesia and metaphor. In Honeck, R. & Hoffman, R. (Eds.), *Cognition and Figurative Language*. Lawrence Erlbaum Associates.
- Rosch, E. & Mervis, C. (1975). Family resemblances: studies in the internal structure of categories. *Cognitive Psychology*, 7, 573–605.
- Rudzka-Ostyn, B. (1995). Metaphor, schema, invariance: The case of verbs of answering. In Goossens, L. et al. (Eds.), *By Word of Mouth: Metaphor, Metonymy and Linguistic Action in a Cognitive Perspective*, pp. 205–243. John Benjamins, Amsterdam.
- 坂本 真樹, 内海 彰 (2007). 色彩形容詞と名詞の相互作用による色彩形容詞メタファーの認知効果. 認知科学, 14(3), 380–397.
- Sakamoto, M. & Utsumi, A. (2008). Semantic diversity revealed by a comparison between the types of adjective metaphors: Correlation vs. resemblance. In *Proceedings of the 6th International Conference on Cognitive Science (ICCS2008)*.
- 佐藤 信夫 (1978). レトリック感覚. 講談社. (講談社学術文庫, 1992).
- 佐藤 信夫, 佐々木 健一, 松尾 大 (2006). レトリック事典. 大修館書店.
- Schank, R. (1975). *Conceptual Information Processing*. North Holland.
- 瀬戸 賢一 (1997). 認識のレトリック. 海鳴社.
- 瀬戸 賢一 (2007). メタファーと多義語の記述. 楠見 孝 (編), *メタファー研究の最前線*, pp. 31–61. ひつじ書房.
- 菅野 盾樹 (2003). 新修辞学. 世織書房.
- 谷口 一美 (2003). 認知意味論の新展開: メタファーとメトニミー. 研究社.
- Taylor, J. (2003). *Linguistic Categorization*. Oxford University Press.
- Torreano, L., Cacciari, C., & Glucksberg, S. (2005). When dogs can fly: Level of abstraction as a cue to metaphorical use of verbs. *Metaphor and Symbol*, 20(4), 259–274.
- 内海 彰 (2000). 比喩の認知 / 計算モデル. *Computer Today*, 96, 34–39.
- 内海 彰 (2001). 詩的比喩とは何か? 現代メタファー論の検討と詩的比喩の認知・計算モデルの考察. 人工知能学会第 15 回全国大会論文集, pp. 2E1–02, 1–2.
- Utsumi, A. (2006). Computational exploration of metaphor comprehension processes. In *Proceedings of the 28th Annual Meeting of the Cognitive Science Society (CogSci2006)*, pp. 2281–2286.
- Utsumi, A. (2007). Interpretive diversity explains metaphor-simile distinction. *Metaphor and Symbol*, 22(4), 291–312.
- Utsumi, A., Hori, K., & Ohsuga, S. (1998). An affective-similarity-based method for comprehending attributional metaphors. *Journal of Natural Language Processing*, 5(3), 3–32.
- 内海 彰, 坂本 真樹 (2006). 形容詞メタファーは 2 段階カテゴリー化で理解される - 計算機シミュレーションによる検討 -. 人工知能学会第 24 回ことば工学研究会資料, pp. 13–20.
- Utsumi, A. & Sakamoto, M. (2007a). Computational evidence for two-stage categorization as a process of adjective metaphor comprehension. In *Proceedings of the Second European Cognitive Science Conference (EuroCogSci2007)*, pp. 77–82.
- Utsumi, A. & Sakamoto, M. (2007b). Predicative metaphors are understood as two-stage categorization: Computational evidence by latent semantic analysis. In *Proceedings of the 29th Annual Meeting of the Cognitive Science Society (CogSci2007)*, pp. 1587–1592.
- Utsumi, A. & Sakamoto, M. (2008). Resemblance-based and correlation-based adjective metaphors are understood differently: Computational evidence using latent semantic analysis. Manuscript submitted for publication.
- Wilson, D. & Sperber, D. (2004). Relevance theory. In Horn, L. & Ward, G. (Eds.), *Handbook of Pragmatics*, pp. 607–632. Oxford, Basil Blackwell.